

陸軍軍医総監医学博士佐藤進略伝

酒井シヅ（順天堂大学名誉教授）

明治時代、順天堂第3代堂主佐藤進は、平時には順天堂の院長を、戦時には軍医総監として活躍し、その名を全国にひろめた。又、明治39年の日韓協約調印後は、勅命を受け韓国の衛生責任者となり、伝染病の征圧、大韓医院（現ソウル大学医学部）の創設など、国際的に活躍した。明治32年発行の『太陽臨時増刊号』（博文館刊）に、読者が選んだ「明治の十二傑」が掲載されるが、政治家 伊藤博文、教育家 福沢諭吉とならんで、医家 佐藤進が選出されている。これらからも進の評判が高かったことが窺われる。進は弘化2（1845）年11月25日、常陸太田の醸造業高和清兵衛の長男として生まれ、15歳で医学を志し佐倉の順天堂に入塾、やがて多くの門人のなかで頭角を現し順天堂の第2代堂主 佐藤尚中の養嗣子となった。

戊辰戦争では官軍側の軍医として従軍。初めて経験した近代戦の負傷者救済に自分の無力を痛感し、ドイツ留学を決意。明治2（1869）年、国が正式に発行した旅券（パスポート）第一号を携えドイツへ留学した。

当地では、先ず語学を習得し、翌年ベルリン大学医学部に入学した。その頃の留学生には珍しく、全課程、正規のコースを修学し、明治7（1874）年、アジア人初のベルリン大学医学博士号を取得し、翌年帰国した。帰国後、順天堂で診療と医育に当たり、明治10年の西南戦争では、一等軍医正として最先端の医療を行い、多くの負傷兵を助け名声を博した。日清、日露戦争では陸軍軍医総監として活躍した。

明治28（1895）年、日清講和条約調印のために来日した、清国全権大臣 李鴻章が、下関で暴漢に襲われ負傷する事件が起こった。明治天皇の勅命により、陸軍軍医総監佐藤進が現地に急行し治療を行った。万一のことがあれば、日清条約締結が破談になる。日本中が固唾を飲んで事件の成り行きを見守るなか、進の献身的な治療により李鴻章の傷は無事に快癒し、日清条約は無事に締結された。

進の治療により快方に向かった李鴻章は、進が治療中も常に帯剣しているのを不思議に思い、そのわけを尋ねたところ、進は「これは人を活かす剣である。日夜病と闘い必ずこれに勝つのです。」と答えた。その言葉に感銘した李鴻章は、進に七言律詩を贈り、進を「妙手回春」の国手と讃えた。この話が巷にひろまり、ふたりの友情を生み出した進の言動は人々を感動させた。かねて進と親交のあった可睡齋の日置黙仙禅師は、進の偉業を讃え、記念碑を建立することを発願、明治33年に高村光雲による「活人剣」が建立された。しかし、この剣は第二次大戦中に供出され、長い間、台座だけが残った。

日露戦争でも、進は軍医総監として出仕し、広島陸軍予備病院院長となり、捕虜収容、大陸の前戦視察など往事に変わらぬ活躍をした。この時、還暦目前であった進は、自分の年齢を考慮し他の者を推薦したが、陸軍軍医総監 石黒忠恵は、「兵士にとって進に代わる軍医はいない」と、その申し出を断った。進が従軍することが、兵士やその家族に大きな安心を与えることを知っていたからである。当時の佐藤進という医師が、日本国民にとってどのような存在であったかがわかるエピソードである。

進は、明治天皇の勅命により、韓国の衛生責任者となり渡韓、伝染病対策を徹底させ、近代的な大韓病院を建立し初代院長となった。現ソウル大学の最古の建物として今も残っている。これらの功績により、明治40（1907）年に男爵に叙せられた。

晩年は、『水戸義公伝』を著す一方、現東京医科大学設立に尽力し、又、女子美術学校の経営にも携わるなど、多方面にわたり社会に貢献し、大正10年7月25日、本郷駒込の邸宅で77年の生涯を静かに終えた。